

とある人形師の英雄譚

白雪の人形師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人形師が魔法学校の仲間たちと敵と戦ったり共に成長したり恋愛をしたりする物語です。

目次

第1話	とある人形師と魔法学校	1
第2話	とある人形師と模擬戦	4

第1話 とある人形師と魔法学校

くプロローグ

昔々あるところに人形師がおりました。

その人形師の人形は、とても美しくまるで本当に生きているようだと言われていました。

その人形はお姫様やお金持ちの娘さんたちしか買ってもらえない程のもので瞬くまに噂が広がりました。

その男は、名を アシュトIIカイザー と言いました。

第1章 英雄譚の始まり

ここは、アイランドオブウイザードと呼ばれる人口島だ

ここには、約300人に1人の割合で生まれる魔法使いの学校がたっている。

魔法高等学校2年3組には、いつもの朝の声が響いていた

『ホームルームを始めるさつきと座れガキども

5秒以内に座らないやつには、成績にバツをプレゼントしてやる』

「千影（ちかげ）ちゃんそんなの酷いよー」

千影『先生をちゃん付けで呼ぶな』

今千影先生と話しているのは、私の親友

ローゼンIIアステイいつも元気がいい優しい子です。

千影『えー今日は、編入生を紹介する。』

アステイ「先生その人は、男子ですか」

またアステイが喋ったでも魔法使いの中で

男子は、5%ほどしかないなので聞いてもあまり意味はない。

千影『えー編入生は、なんと男子だ。』

「えー嘘〜」「イケメンかなー」

クラスみんながざわつき始めたちなみに

うちの学校は、男子が1人もいない

千影『あーお前らうっさい静かにしろ

編入生入ってこい』

扉がガチャリと音をたてて開いたそこから、黒よりも黒いローブを着た男が入って来た髪は、長く目にかかっていた。

千影『編入生自己紹介をしろ。』

編入生が黒板にチョークで 榊 黒夜（さかき くろや）と書いた。

黒夜 「榊 黒夜です。得意な魔法は物質変換や物質生成

使用する魔具は、魔法剣や魔法銃です。」

千影 『じゃあ榊の席はフィーナⅡエイリンの横だ

榊わからないことがあればエイリンに聞いてくれ』

急に名前を呼ばれてビックリした

黒夜 「エイリンさんよろしくお願いします。」

エイリン 「あつよろしく私は、フィーナⅡエイリン

エイリンでいいし敬語じゃなくて

いいから」

黒夜 「じゃあよろしくエイリン俺も呼び捨て

でいいから。」

アステイ 「ビュービューお熱いねー」

アステイが茶化するとみんなも

「あーうらやましー」「ビュー

ビュー」

と茶化して来た

エイリン 「エイリンもみんなもかわらないで

黒夜くんも困ってるでしょー。」

アステイ 「呼び捨てじゃなくていいのー」

エイリン 「アステイ〜」

「ごめんね黒夜くんみんな悪気が

あって

言ってるわけじゃないの

よ」

黒夜 「わかってるよエイリン気にしない

で」

こうして私達の物語は、呼吸を始めたのです。

くエピローグく

君は、アシユトIIカイザーの話の続きを知っているだろうか？

そう表では、語られないもう一つの話は：

だがこの話はまた次の機会に

第2話 とある人形師と模擬戦

くプロローグ

さあ、もう一つのアシュトIIカイザーの話しをしよう。
そうこれは、決して表舞台では語られることのなかった話だ。
それは、アシュトIIカイザーが魔法使いだったという話だ
しかし、それだけではたいしたことではない
そうお察しの通りそれだけではなかった
なんと彼は、自分の人形に魂を宿らせることができるというのだ
いささか信じ難い だが彼の人形がひとりでに
動いているのを見たという人は、少なからずいるのだ…

第1章 人形師と英雄譚

ここは、アイランドオブウィザードの男子寮だ内装そこらへんの高級ホテル

にひけをとらないがガランとしていて物悲しい
ピピピピ携帯を見るともう学校に行く時間だ
放り出していたカバンを拾い上げ部屋をでる
学校に向かっているとあちこちから視線を感じる
やはり男の魔法使いは、めずらしいのだろう

黒夜 「うーん やっぱり男ひとりキツイな」
クラスメイトからの視線を感じながらも

二時間目の終わりを迎えた

千影 『お前ら3・4時間目は、魔導実技だから
とっとと着替えて第3アリーナに集合し
ろ。』

黒夜 「えっと男子更衣室は、何処にあるんですか。」

千影 『あるにはあるが今は物置として使われてるから
お前はここで着替えろ。』

千影 『えー今日は魔導祭にむけて模擬戦を行う魔導
祭を知らない

祭とは1年に一回行われる

奴のために説明しておくが魔導

魔法校同士の戦いだ とりあえ

ずお前らランクごとにわかれて

模擬戦をしてみよう」

アステイ 「ところで黒夜君は、ランクは何なの？」

黒夜 「僕はランクなしなんだ…」

「ランクとは魔法使いの序列のようなもので

S S S S S S A B C D E

ランクなしの順である」

アステイ 「そうなんだ」

西園寺 「その転校生私と勝負しなさい」

黒夜 「あなたは？」

西園寺 「あなたはこのクラス委員長であり西園寺財閥次期

当主であるこの私を知らないん

ですの」

千景 「よし黒夜、西園寺と模擬戦をしろ」

エイリン 「ちよつと先生西園寺さんは、Bランク

なんですよ」

千景 「いいから黙って見てろ」

エイリン 「黒夜くん危なくなったらすぐに降参してね」

黒夜 「大丈夫だよエイリン」

千景 「ルールを説明する勝利条件は、

相手を

気絶させるか相手

がこうさんするかだ

武器は殺傷能力の

低いものとし魔法は

第三階級魔法まで

とする」

魔法は第 1〜10までそのうえに固有魔法があり

第7階級魔法が使えるのは、15%程である／

西園寺 「逃げるなら今のうちでしてよ」

黒夜 「大丈夫です」

千景 「それでは戦闘開始」

こうして模擬戦の火蓋は、切って下されたのだ

くエピソードく

こんな話を聞いたことがあるだろうか

100年ごとに現れ世界にひとつの物語をのこす

男の話をその男はある時は人形師だったという